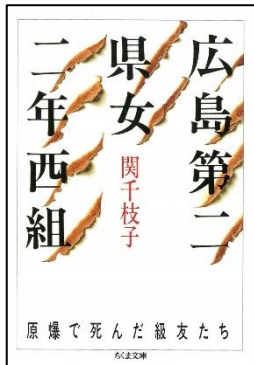




2021年8月館員おすすめの本

『広島第二県女二年西組』（関千枝子）

原 真由美



1945年8月6日、広島。著者の関千枝子さんはその日、学校を病欠したため奇跡的に難を逃れましたが、建物疎開作業中に被爆した担任とクラスメイト39名が死亡。生き残った息苦しさを背負い続け、やがて友人たちの生きた証を記録に残すことが供養になると、終戦から30年後、遺族を訪ねて被爆から死に至る足跡を一人一人丁寧に聞き取り調査しました。救助を求め逃げ惑う様子や、最愛の娘を探し続けた肉親の姿が感情を抑えて綴られています。八月六日から十五日までの十日間は、私にとって、三年にも四年にも匹敵

し「十三歳の少女にとっては、“激しすぎる夏”」だったと振り返るように、あの日の記憶を再び呼び起こすことは並大抵の作業ではなかったでしょう。また風評被害を恐れ語れない人がいかに多くいるかとも思い知りました。終戦の日、不敗の神国と庶民は騙され続けていたことを直感し、聖戦と信じて亡くなった友人たちの無念さは計り知れないと言います。毎日新聞などの記者を経てアメリカへ渡り、図書室開設の経験から帰国後横浜市図書館運動に尽力。2021年2月、88歳で亡くなりました。（筑摩書房）

『夏物語』（川上未映子）

大久保美玲

2部構成の本書前半は、小説家を目指す主人公夏子の姉である卷子の「乳（ちち）」問題（豊胸問題）と、その一人娘緑子の「卵（らん）」問題（初潮を迎えるにあたっての葛藤）が、後半は夏子の「卵」問題（子どもを産むかどうかについて）が描かれています。「乳」と「卵」は、女性にまつわるあらゆるしがらみの象徴。ヒリヒリとした空気感をまといながらも、大阪弁特有のコミカルさがそれを中和して、なんとも愉快地読み進めることができます。

卷子と緑子はお互いぶつかり合い、溝を埋めることによって、それぞれの問題を昇華させます。一方夏子は、多面的に「産む」ということをとらえつつ、最終的に「非配偶者間人工授精（AID）」いわゆる「精子提供」という道を選択します。それまでに至る道のりは、読者に、人間が子どもをのこすことの意味や、過去から未来へと続くいのちの連鎖の尊さを強く訴えかけるようにも感じました。（文藝春秋）

